

『マハーバーラタ』における戦士の変装

——ビーマはなぜ料理人に変装したのか

沖田 瑞穂*

『マハーバーラタ』の主役の英雄パンダヴァ五兄弟の一人ビーマは、巨大な体軀と怪力の特徴とする荒々しい戦士である。そのビーマが、第四卷ヴィラータ・パルヴァンの冒頭部分において、ヴィラータ王の宮殿に正体を隠して潜り込むために、料理人に変装するという場面がある。巨軀の戦士と料理人というこの一見不釣り合いな組み合わせに関しては、すでにデュメジル (G. Dumézil) によっても疑問が提示されているが、納得のいく説明はされていないと思われる。

そこで本稿では、このビーマの変装について、他のパンダヴァ、特にビーマと同じ戦士であるアルジュナの変装と対比させながら考察し、彼らの変装の中に、インド・ヨーロッパ語族の三機能体系の、一つの機微が表現されている可能性を提示したい。

1 パンダヴァの変装

『マハーバーラタ』第四卷の冒頭において、放浪の旅の最後の一年間を誰にも正体を見破られずに過ごすために、パンダヴァはヴィラータ

王の宮殿にそれぞれの長所を生かした変装をして潜り込むことにした。この時どのような変装をするか、各々が次のように説明する。

(ユディシュティラ) 「私はカンカという名の、骰子に精通した、賭博を好むバラモン (dvija) となって、かの偉大な王の宮殿に仕える者になろう。猫目石や黄金や象牙 (の骰子) と、輝いて好ましい木の実の骰子、黒色や赤色の魅力的な (骰子を)、私は転がそう。もし私について王に聞かれたら、私はかつてユディシュティラの親友であったと答えよう」。(4.1.20-22)⁽¹⁾

(ビーマ) 「私はパッラヴァという名の、王宮の厨房の長 (paulo-baba) であると称して、ヴィラータ王に仕えよう。これが私の考えである。私は彼のためにスープを作ろう、私は台所において巧みである。以前に王の香辛料を作っていた熟練の調理人たちをも凌駕して、王を喜ばせるだろう。私は大きな薪の束を運ぼう。その力仕事を見て王は喜ぶだろう。強力な象や力強い雄牛たちがもし私によって制御されるべきなら、私はそれらを制御しよう。闘技場で挑戦してくる格闘士は誰であれ、その者たちを私は倒すだろう、そして王の喜びを増大させるだろう。しかし私は、それらの格闘士たちを決して殺さない。死に至ることのないように、彼らを倒す。私はユディシュティラの料理人 (ataika) で牛の屠殺人、スープ作り、格闘士であったと、尋ねた者たちに答えよう」。(4.2.1-7)

(アルジュナ) 「王よ、私は女形 (宦官 sandhaka) であると称します。両腕の大きな弓弦の傷跡を隠すことは難しいので。私は両耳

に火のような耳輪をつけて、髪を結い上げ、ブリハンナダーと名乗ります。私は女となり、何度も物語を語って、王とその他の後宮の人々を楽しませます。歌や様々な踊り、種々の楽器を、ヴィラータ王宮で女たちに教えます。臣下たちに礼儀作法や仕事のやり方をたくさん教えます。マールヤー(幻力)によって私は自分で自分を隠しましょう。王に聞かれたら、ユディシュティラの屋敷でドラウパデイーの従者として住んでいたと答えます。このような方法で詐術が行われることにより、ナラ王のように、ヴィラータの王宮で私は幸福に過ごします」。(4.2, 21-27)

(ナクラ) 「私はヴィラータ王の馬丁になりました。グランティカと名乗ります。私にとってこの仕事は好ましいものです。私は馬の調教と馬の治療に秀でています。私にとって常に、馬は愛しいものです。クルの王よ、あなた(にとって馬が愛しいの)と同様に。ヴィラータ王の都で人々が私に尋ねたら、その者たちに私は(兄たちと)同様に(うまく)答えましょう。私は快適に過ごします(異本に基づく)」。(4.3, 2-4)

(サハデーヴァ) 「私は大王ヴィラータの牛飼いになります。牛を守り、乳を搾ります。私は牛たちの数を数えることに巧みです。タンティパーラと名乗ります。(そのことを)あなたに承知しておいてもらえますよう。うまく立ち回ります。あなたの心の苦悩が去りますように。以前私は常に牛に関することでああなたに使われていました。そこで私の技術と仕事が習得されました。牛たちの特徴、行動、瑞相、それら全てが私にとって良く把握されています。その他

のことも。王よ、私は誉れある特徴を有する雄牛たちについても知っています。その牛たちの尿を嗅げば、不妊の牝牛たちでさえも孕むのです。私はこのようにして暮らします。これは私にとって常に楽しいことです。他人が私であると知ることにはないでしょう。このことがあなたに賛同してもらえますように、王よ」。(4.3, 6-11)

2 ウィカンデルとデュメジルの解釈

スウェーデンのインド・イラン学者ウィカンデル(S. Wikander)は、デュメジルの三機能体系説に基づいてパーンダヴァのそれぞれの性格を分析し、徳高い聖王であるユディシュティラは第一機能(聖性・王権・法)を、戦士であるビーマとアルジュナは第二機能(戦闘)を、美しさを最大の特徴とする双子のナクラとサハデーヴァは第三機能(生産性)を、それぞれ管掌していると考えた。さらに戦士の二人に関して、一方のビーマが野生的で暴力的な格闘家であるのに対し、他方のアルジュナは文明的で秩序に従順な、理想的な戦士であるという、好対照をなしている⁽³⁾と分析した。

ウィカンデルは、ヴィラータ王宮における変装の場面にはパーンダヴァの個々の機能が際立って表れていると考えた(MQ 4: 48-49)。彼によると、ナクラとサハデーヴァの双子は馬と牛の飼育係に変装し優れた医療技術を発揮するが、彼らの父神アシュヴィンは医療の神でもある。またナクラはヴィラータに対して「ヴァイシヤである」と自己紹介しているが、アシュヴィンは古くはヴァイシヤ(第三機能)の守護神として、バラモン(第一機能)、クシャトリア(第二機能)の水準にある神々と

対比されていた。ビーマに関しては、ウィカンドルは「格闘士」に変装した、としか述べていない。後述するように、格闘士としての職業はビーマが選んだ変装の中の付随的なものである。女装して技芸の師となったアルジュナについては、「戦士としての資質を隠すのに相応しい変装をしている」と簡潔に述べている。ユディシュティラには他の兄弟たちとは異なり、これといった特技がない。ウィカンドルによればそれは彼が「王」であるためで、王としての自身のダルマに従う以外に、彼は役割を持たない。彼が物語の進行に対して行うほとんど唯一の貢献が二度の骰子ゲームであるが、これこそが彼特有の (unique) 技能であるという。

デュメジルは、パーンダヴァ五兄弟に三機能体系が表れているとするウィカンドルの説を全面的に支持し、自らも幾つかの重要な発展を付け加えた。その中で、ビーマの料理人への変装に対して次のような疑問を提示している (JM 4: 59)。

肉屋だから料理人なのか？この特徴は私には解決できない問題である。確かに「ヘラクレス」型の英雄（ヘラクレス、ツール、ダグザ、ビーマ）は皆大食漢である。しかしそれは別の問題である。「肉屋」ということに関して言えば、ビーマの勝利に対して詩の中でしばしば用いられる「家畜の死」という表現を参照せよ。彼は敵を拳の一撃か窒息させることによって殺すのだ。

この疑問が提示された一九四八年の二十年後、『マハーバーラタ』の構造をより詳細に論じた *Mythe et Épopée* 1 において、デュメジルは五兄弟の変装と彼らの機能との関連について再度取りあげている。⁽⁵⁾ まずデ

ュメジルは、パーンダヴァが、機能においてはそれぞれ異なる水準に位置しているが、その生まれにおいては五人ともクシャトリヤ (ksatriya 戦士階級) であることに注意を向け、パーンダヴァ誕生の場面において、*ksatra ksatriya* の語がどのように用いられているかを分析した。

パーンドウ王はある聖仙の呪いを受けたために自らの種によって子を作ることが出来ない体になっていた。そこで王妃のクンティが呪文を用いて望みの神を呼び出し、その神の種によって子を得ることになった。最初にダルマ神が呼び出され、ユディシュティラが誕生した。この時、天から姿のないものの声が響いて、彼について次のように告げた。

「この者は疑いなくダルマを守る者たち (王) の中の最高の者となるだろう。パーンドウの最初の息子は、ユディシュティラとして知られる。彼は栄誉 (yaso) と威光 (tejas) と良き行い (virtutem) を有する、三界に知れ渡る名高い王となるだろう」。(1, 114, 6-7)

ユディシュティラを得た後、パーンドウは二番目の息子の父親として風神ヴァーユを呼び出す理由を、こう説明した。

「王族 (ksatram) は力において最も優れている (balajyestam) と言われる。力に優れた息子を選べ」。夫にそのように言われて、彼女 (クンティ) はヴァーユを呼んだ。彼から、恐ろしい武勇を有する大力のビーマが生まれた。誕生した強力でゆるぎない彼について、声は告げた。「この者は全ての力あるものたちの中の、最高の者として誕生した」。(1, 114, 8-10)

次にパーンドゥは、世界で最も優れた息子が欲しいと望み、神々の王インドラを父親として呼び出すために、激しい苦行を行った。そしてインドラを満足させた上で、再びクンティーにこう言った。

「政略を知り、偉大で、太陽のような威光を有し、無敵で行動力に富み、素晴らしい瑞相を持つ、クシャトリヤ (ksatriya) の威光の拠り所となるような息子を生みなさい。神々の王の恩寵が得られたのだ。彼を呼びなさい、微笑み美しい女よ」。(1, 114, 25-26)

こうしてクンティーに三人の素晴らしい息子が出来ると、もう一人の妃マードリーは、自分にも子どもが欲しいと望み、クンティーの呪文によってアシュヴィン双神を呼び出して双子の息子を得た。この息子たちについて、声がこう告げた。

「この二人は他の者たちを凌駕して、容色 (rūpa) と活力 (satva) と美質 (guṇa) を備え、威光によって燦然と輝く。容色 (rūpa) と富 (draviṇa) と繁栄 (sāmpadā) を有する彼らは」。(1, 115, 18)

このように、パーンダヴァ誕生の場面において、ksātra, ksatriya の語はビーマとアルジュナに関する部分でしか用いられていない。この二人は実際、その機能においても「戦士」なのだ。また、ユディシュティラに関しては行いの正しさが強調され、双子に関しては美しさと豊かさが増調されている。

一方、変装の場面を見てみると、ユディシュティラはバラモン

(brāhmaṇa) であると名乗り (4.6, 10)、牧者に変装した双子のうち、少なくとも一方(サハデーヴァ)は、自分はヴァイシャ (vaiśya) であると明言している (4.9, 4)。しかしビーマとアルジュナに関しては、どのヴァルナに変装したのか、明記されていない。デュメジルは以上のような分析を以下の表に整理している。

	Naissances	Déguisements
Yudhisṭhira	[ksatriya]	brāhmaṇa
Bhima	ksatriya	[artisan]
Arjuna	ksatriya	[artisan]
les jumeaux	[ksatriya]	vaiśya

デュメジルによれば、ビーマとアルジュナの職人 (artisan) への変装も、彼らの機能と無関係ではない。ビーマは「格闘士」「牛の屠殺人」になり、「料理人」は牛の屠殺人としての姿の延長であるという。

アルジュナは歌と踊りの師として、装飾品を身に纏った女形になる。

この変装は、『リグ・ヴェーダ』讃歌における彼の父神インドラと、インドラに従う戦士集団マルトの特徴と一致するという。「踊り手」を意味する nṛtu という語は『リグ・ヴェーダ』中に八回しか出てこないが、そのうち六回はインドラに対して用いられ、一回はマルト神群に、一回はアシュヴィン双神に用いられる。戦士集団であるマルトたちは、装身具に非常に執心しており、肩や胸などを常にきらびやかに飾っている。それと同時に、戦士としての資質も明確に有しているという。

3 第一機能・第三機能内部の機能分化

すでに見たように、デュメジルは *JMG 4* において、ビーマの料理人への変装に対して疑問を提示し、彼が敵を「家畜のように」殺すことと関連するか、と述べている。また *MEI* では、牛の屠殺人としての姿の延長であろう、と説明している。

しかし私見によれば、ビーマと料理人という不可解な組み合わせは、デュメジルの三機能体系説を援用して、「第二機能内部における機能分化」という方向から考察することによって説明できる可能性がある。三つの機能は、それぞれ対照的で相補的な二人の神あるいは人によって代表されているが、その二者は、他の二つの機能に対して、それぞれ異なる方向に親縁性を示すのである。まず第一機能と第三機能の領域においてデュメジルとウィカンデルが行った分析を確認したい。

ヴェーダ神話において第一機能を管掌していたのはヴァルナとミトラの二神である。互いに不可分と言ってよいほど緊密な関係にあるこの二神には、相補的で対照的な性格の差異が認められる。ヴァルナが天上の高みに位置し、時に暴力的な様相をも表す峻厳な魔術師であるのに対し、ミトラは人間に近い領域に関心を持ち、温和で平和を好む。つまりヴァルナは第二機能に近い性質を示し、ミトラは第三機能に親密である。これと同じ構造は、『マハーバーラタ』において第一機能を管掌する世代の異なる二人の王、パンドゥとユディシュティラにも認められる。デュメジルによれば、パンドヴァ五兄弟の名目上の父パンドゥは、性的不能、青白い肌などの特異な要素をヴァルナと共有しており、原文のどこにもそうとは書かれていないものの、ヴァルナの「化身」とも言うべき位置にある。ユディシュティラは、抽象的人格神ダルマの種によって誕生したが、その性質はヴェーダのミトラと酷似しており、ミトラ的第一機能の性質を引き継いでいると考えられる。

デュメジルはこの両者の王国統治の方法の差異に注目した。パンドゥの王国統治の特徴は、軍隊を率いて諸国を征服するための戦争を次々と行い、各地で勝利し、戦利品によって王国を豊かにしたことにある。つまり戦闘を手段とした第二機能的な王国統治の方法である。ユディシュティラの統治の特徴はパンドゥと対照的で牧歌的である。ビーシュマは言う、「ユディシュティラの支配する地は、秩序と平和に満ち、各々がダルマに従い、雨は必要な時に降り、収穫は十分で、家畜は繁栄し、人々は平和を愛し、妬みなく、寛大で誠実である」。豊穡と平和を謳歌する第三機能的な統治であると言える (*MEI* 1: 153-157)。

次に第三機能内部の機能分化について見ていきたい。ヴェーダ神話で第三機能を管掌するアシュヴィン双神は、互いに瓜二つで常に行動を共にする。ヴェーダ文献のほとんどは彼らの間の差異を記していない。しかし例外的に、『リグ・ヴェーダ』一・一八一・四は、双神の出自の差異を語る。それによると、双神の一方は裕福な戦争の勝利者であり、他方は幸運な (*sudhaga*) 天の息子である。戦争の勝利者とされている方のアシュヴィンに戦士機能との関連が想定されるのに対し、幸運な天の息子とされている方のアシュヴィンには、天上の主権機能との関連が窺われる。

ウィカンデルは、「ナクラとサハデーヴァ」と題する一九五八年の論文において、『マハーバーラタ』におけるアシュヴィンの双子の息子、ナクラとサハデーヴァに当てられている形容句を詳細に検討することで、第三機能の双子の間に見られる差異を明らかにした。それによると、ナクラとサハデーヴァはどちらも、第三機能の代表者に相応しくその美しさを賛美され、また叙事詩の全ての英雄がそうであるように、戦闘における強さも持ち合わせている。しかし双子のうちナクラだけに用いられ

る形容句には、「美しい (darsaniya)」「無比の戦士 (atiratha)」「あらゆる戦に長じた (sarvayuddhaviśārada)」など、美しさと強さを強調するものが目立つが、これらの語が単独でサハデーヴァに用いられることはない。これに対してサハデーヴァは、賢明さ、謙虚さ、温厚さなどによってナクラと区別されている。

双子のそれぞれと三人の兄たちとの協力関係にも、一定の傾向が認められるという。戦闘において五人のパーンダヴァが互いに協力しあう時、ビーマはナクラと、ユディシュティラはサハデーヴァと共に戦う。第十四巻において、アシュヴァメーダ (馬祀) の準備のためにユディシュティラが政治を離れた時、サハデーヴァは彼の代理として内政を任せられ、ナクラはビーマと共に王国の防衛を担当する。

さらにデュメジルは、次のような事例を付け加えることで双子の性格の差異をより明確にした (ME1:80)。ヴィラータ王宮において、ナクラは馬丁に、サハデーヴァは牛飼いに身を変えた。馬は、インド・ヨーロッパ語族の代表的な戦闘手段である戦車を牽く動物であることから戦士の機能と関連し、牛は、その産物である乳製品が祭式に不可欠であることから、聖なる機能と関連する。つまり、馬丁に変装したナクラは第二機能に近く、牛飼いに変装したサハデーヴァは第一機能に近い性質を示している。

以上を要約すると、叙事詩における第三機能の双子には、次のような差異が認められる。ナクラは美しさと強さに秀でており、兄弟の中ではビーマと特に親しく、第二機能との結びつきを示す。サハデーヴァは知恵、正義、賢明さなどの分野に優れ、兄弟の中ではユディシュティラと協力関係を築いており、第一機能と親密である。

4 第二機能内部の機能分化

第一機能と第三機能の領域に対してデュメジルとウィカンドルが行った分析を参考に、ビーマとアルジュナの変装を見直してみたい。

ビーマの変装には、「料理人」「牛の屠殺人」「薪運び」「格闘士」など色々な仕事が付随している。ウィカンドルとデュメジルは、ビーマの主な仕事は「格闘士」「牛の屠殺人」であると考えていたようである。そこで、これらの仕事テキストの中でどのような順番で言及されているか、確認してみたい。

ユディシュティラに自分の変装について説明する場面においてビーマは、料理人 (スープやスパイスを作る) ↓薪の束運び (力仕事) ↓象や牛を制御↓格闘士、の順で自分が行おうとする職業を挙げている。「料理人」が最初に挙げられていることに注目しておきたい。その他の仕事は、ビーマの性格とうまく一致する力業ではあるが、位置づけは付加的である。同様のことが、すぐ後の詩句にも見られる。ユディシュティラとの会話の中でビーマは、誰かに自分を尋ねられた時には、「私は料理人で、牛の屠殺人、スープ作り、格闘士である」と答えるつもりであると発言している。ここでもまず「料理人」が挙げられ、牛の屠殺人・スープ作りが続く。この二つはどちらも、料理人としての仕事の範疇なのである。先の例と同様、格闘士が一番最後である。

もう一つの例は、パーンダヴァが一人ずつヴィラータ王の宮殿に行き各自決めておいた職につくためにヴィラータ王と会話を交わす場面である。ビーマは「杓子と匙と、傷一つない抜き身の黒い包丁を手にして」王宮に現れる。そのビーマの見事な姿を見たヴィラータが彼に素性を尋

ねると、ビーマは次のように答える。

「王様、私は料理人でああなたの召使です。とりわけ、特別のスープについて熟練しています。そのスープは以前ユディシュティラ王によっていつも味わわれていました。また、力において私に等しい者は存在しません。王よ、私はいつも格闘を好みます。象や獅子とも戦います。欠点のないお方よ、私はいつもあなたの氣に入ることをお願いします」。(4.7.7-8)

ビーマの言葉に答えて、ヴィラータはこう述べる。

「おお、あなたの望みを叶えよう、台所で巧みに働きたいとあなたが言うのだから。しかしその仕事がああなたに相応しいとは思わない。海に囲まれた大地（を治めること）こそがああなたに相応しい。しかし、あなたの望み通りにしなさい。私の台所の長となりなさい。そこには以前に私が集めた人々がいるが、その者たちの長となりなさい、私の命により」。(4.7.9-10)

ここでもビーマは、料理人の姿をして王宮に現れ、料理人↓格闘士の順で自己紹介をしている。それに対するヴィラータ王の返答も興味深い。彼は料理人として働きたいというビーマの要望に対しては十分に答えているが、格闘士としての働きについては全く触れていない。

以上のことから、ビーマが選んだ仕事の主体は「料理人」であることが分かる。料理という営みは、生産活動そのものである。つまりインド・ヨーロッパ語族の観念においては、第三機能の領域に属すると考え

られる。また、ビーマが用いたバツラヴァ (ballava) という偽名は、Apte の梵英辞典によれば、第一義が〈cowherd〉で、第二義が〈cook〉であるので、この偽名自体が第三機能の性質を示していると言える。つまりこの場面においてビーマは、第二機能の本性を隠し第三機能的な変装をしたことになるのではないだろうか。

アルジュナは「女形」に変装をする。女装して装身具で身を飾り立てることは、弓矢で傷ついた腕を隠すために好都合であると、アルジュナ自身が説明している。なお、戦士の女装というモチーフは、アキレウス（ギリシャ）、トール（ゲルマン）、ウリュズメグ（オセツト）、ヤマトタケル（日本）など多くの例が認められる。

アルジュナの仕事の内容がどのような順番で挙げられているのかも確認しておこう。ユディシュティラに対して自分の変装を説明する場面では、物語を語る↓歌・踊り・楽器の教授↓礼儀作法・仕事のやり方の教授、の順で挙げている。ヴィラータ王の前では、「歌い、踊り、楽器を弾く(4.10.8)」と言っている。この時ヴィラータ王はアルジュナの技を試すが、その項目は「技芸・舞踏・楽器」であった(4.10.11)。

アルジュナの仕事はどれも、インド・ヨーロッパ語族の観念の上では、第一機能の範囲に属すると思われる。語りや歌などの芸能は、古代においては宗教的な意味を持つ神聖なものであった。また「知識」も第一機能の領域である。

語りや歌がインド・ヨーロッパ語族の神話の中でそれほど深刻な力を持つと考えられていたかを示す良い例が、ケルトの神話にある。ダーヌ神族とフォモーレの両方の血を引くプレスが王位についていた時、彼は大変な暴君でしかも吝嗇だったので、王としての礼儀である、詩人をもてなすことをしなかった。ある時コーブルという吟遊詩人が王宮にやっ

て来たが、プレスは彼をまったくもてなさず、冷たい部屋に寝かせ、乾いたパンを三切れ出しただけだった。コープルはその返礼に次のような歌をうたった。⁽⁷⁾

皿には食べ物がすぐには盛られず／子牛が飲み育つミルクすらない
／夜の真っ暗やみは人間のすみ家でない／詩を語る者への報酬も支払
われない／プレス王を同じ目に会わせるがよい。

この吝嗇な王を風刺した詩は国中に伝わって、それがもとでプレスは王位を追われた。詩人の「語り」や「歌」の持つ魔力とも言うべき力が、いかに深刻な影響を王者に及ぼすかをよく表しているエピソードである。アルジュナの技芸は、天上界の神々のもとで習得してきた、それ自体神性を帯びたものであった。アルジュナは放浪の旅の途中で、父神インドラより武器を授かるために単身天界へ行く。この時インドラは次のように言って、技芸を習得することをアルジュナに命じ、師として友人のチトラセーナを紹介する。

「アルジュナよ、神々が作った踊りと歌と楽器を、チトラセーナから学びなさい。人間の世界には存在しないそれらを習得しなさい。そうすればあなたに幸福が訪れるだろう」。(3, 45, 6cd-7)

また、アルジュナはユディシュティラに対して、マヤー（māyā）によって自分の正体を隠す、と述べているが、マヤーは不思議な魔力・呪力を意味し、ヴェーダ神話においてヴァルナ神が駆使する、典型的に第一機能の水準に位置する要素である。

以上の分析から、一九四八年の *MG4* におけるデュメジルの疑問——「肉屋だから料理人なのか？」に対して、次のような返答が可能かもしれない。

『マハーバーラタ』の詩人たちは、パーンダヴァの変装という好機に際して、古い神話的観念に基づく第二機能内部の機能分化を表現しようと考えた。ビーマは第三機能に近い性質を示すために料理人となり、アルジュナは第一機能に近い性質を表すために語り手・技芸の師となった。牛の屠殺人や格闘士という仕事は、ビーマ本来の性質と一致させるための付加的な要素であり、料理人こそが、彼の変装の主体であったと思われる。

この仮説は、ウィカンドルとデュメジルがパーンダヴァに対して行った分析とも、良く整合性を示していると思われる。主権者ユディシュティラに対するビーマとアルジュナの態度には明確な違いがあり、ビーマがしばしばユディシュティラに反抗的であるのに対し、アルジュナは常に彼の味方である (*MG4*: 65-67)。つまりアルジュナは第一機能に対して親密さを示している。先述したウィカンドルの研究にあるように、パーンダヴァの双子の一方のナクラが戦闘や王国の防衛において協力体制を築くのはビーマとである。逆に言うと、ビーマは戦闘において第三機能の双子の一人と協力する。

5 日本神話における戦士機能の二分化

吉田敦彦は、インド・ヨーロッパ語族の神話がユーラシアの遊牧騎馬民族を介して日本古典神話の構造に大きく影響を与えたとする見通しのもと、記紀神話におけるアマテラスを第一機能、スサノヲを第二機能、

オホクニヌシを第三機能の神であると考えた。さらに第二機能に関して、暴力的で自然神としては暴風雨であるスサノヲをヴァーユ・ビーマ型の戦神とし、国譲りの際に活躍する剣神で雷神のタケミカヅチをインドラ・アルジュナ型の戦神であるとした。⁽⁸⁾ 平藤喜久子は、記紀神話にはこれらの神の他に第二機能神としてタケミナカタも存在していると指摘し、怪力の特徴とすること、風の神としての側面も有することなどから、この神をヴァーユ・ビーマ型の戦神であると考えた。⁽⁹⁾

スサノヲ、タケミカヅチ、タケミナカタという三柱の日本の戦神を見てみると、彼らの間にも、ビーマとアルジュナの間に認められたのと同様の機能分化が認められるように思われる。

ヴァーユ・ビーマ型の戦神スサノヲとタケミナカタはどちらも、第三機能の神々の集団である国つ神と密接な関連を有している。スサノヲは、国つ神の王であり第三機能を代表するオホクニヌシの父親(紀第八段本文)あるいは六代前の祖先(記、紀第八段一書第二)であり、根の国を尋ねてきたオホクニヌシに様々な試練を課すことで、オホクニヌシの成長に、特に戦士としての側面を成長させることに大きく貢献した。タケミナカタはそのオホクニヌシの息子である。

インドラ・アルジュナ型のタケミカヅチは天つ神に従順で理想的な戦神として描かれ、常にアマテラスとタカミムスヒを始めとする第一機能神のために戦う。また彼は第一機能神たちとともに天上の高天原に住んでいたことになっているが、このことは、タケミナカタの住居が地上の葦原中国であり、スサノヲが最終的に住んだ場所が根の堅州国であったことと対比できる。

以上のように日本神話の戦神たちにも、ヴァーユ・ビーマ型の戦神は第三機能へ、インドラ・アルジュナ型の戦神は第一機能へ、それぞれ親

縁性を示すという構造が表れていると考えられる。

注

- (1) テキストはブーナ批判版を用いた。
- (2) ブーナ批判版: *viṇarīyaṃ ahaṃ yathā* (4, 3, 4d) 異本 B1. 3 D4: *viṇarīya yathāsukham*。
- (3) "Pāṇḍavasagan och Mahābhāratas mytiska förutsättningar", *Religion och Bibel*, *Nathan Söderblom-sällskapets Årsbok* 4 (1947): 27-39. 中の論文はロマンチックに描いて、若干の省略を伴って仏訳を引用する。"La légende des Pāṇḍava et la substructure mythique du Mahābhārata", *Jupiter Mars Quirinus* 4 (MQ 4), Paris, 1948, pp. 37-53.
- (4) ブーナ批判版では、ヴァーイシヤであると自己紹介したのはサハデーヴァである。vaiśya'smi nāmnā ahaṃ arīṣṭanemir gosāṃkhyā āsaṃ kurupungavānām (4, 9, 4, cd)
- (5) *Mythe et Épopée* I (ME 1), Paris, 1968, pp. 70-73.
- (6) "Nakula et Sahadeva", *Orientalia Suecana* 4 (1958): 66-96.
- (7) 井村君江『ケルトの神話』ちくま文庫、一九九〇年、八六頁。
- (8) 吉田敦彦『日本神話と印欧神話』弘文堂、一九七四年、一八二〜一九二頁。
- (9) 平藤喜久子『神話学と日本の神々』弘文堂、二〇〇四年、一六一〜一六四頁。